

動物の世話を通じて障がい者の自立を目指す

釧路管内・釧路町 NPO法人「馬木葉クラブ」

「こんにちは」、「コンニチハ」、「今日は」
—— 厩舎の清掃作業をしていた障がい者の仕事ぶりをカメラに収めようと近づくと、全員が振り向いて口々に元気なあいさつをかけてきた。つられてこちらも「こんにちは。元気がいいね」。額は汗だくだがその顔はみんな明るく、仕事が楽しくて仕方がないといった表情。

これは馬をはじめとする動物の世話をする事で、知的障がい者に責任感と自立心をつちかってもらおうと、釧路管内釧路町別保に開設されているデイサービス福祉施設・NPO法人「馬木葉クラブ」の晩秋の一日の風景。スタートしてほぼ10年だが、通ってくる障がい者の自立への道は、ゆっくりながら着実に進んでおり、その手法は道内外の同じような福祉施設から注目されている。

■ アニマルセラピーと生きる道

ペットの犬や猫と一緒に過ごしていると、何となく穏やかな気持ちになる経験はだれでも持っているよう。こうした動物とのかかわりが、人間の健康を支え、精神を安定させる効果があることがわかるにつれ近年、病気の療養や独居高齢者の癒しなどに動物を介在させるケースが増えている。アニマルセラピーだ。しかしその大半は、飼育している動物に乗せたり、触れさせたりする

ことを主眼とし、世話をさせるところまでは踏み込まない。「馬木葉クラブ」の場合、障がい者の生きがいや自立心向上の手段として、動物の世話を日常生活の軸に据えて活動しているのが特色。ある意味では新しいアニマルセラピーのあり方ともいえる。



みんな力を合わせて厩舎の掃除。額には汗がキラリッ

このNPOは障がい者の自立に熱い情熱を注いでいた一人の若い福祉施設職員と、その行き方に賛同した障がい者の保護者らの思いが合致して2005年(平成17年)に誕生した。若い職員は岸本慎吾さん(当時25)。初代理事長で、現在は深川市内の福祉施設勤務。深川出身で、母が福祉の仕事をしていた関係で小さい時から福祉活動に関心を持っていた。高校生の頃、生活の中に、喜びや癒しを与えてくれるアニマルセラピーを知り、中でも乗馬によって障がい者に好影響をもたらすホース(馬)セラピーにのめり込んだ。そこで障がい者乗馬の国内唯一の学校だった日高・浦河町の乗馬療育インストラクター養成学校に進学。

1年間、馬と障がい者の関係について理論と実践を学び、人と馬がどう接したらいいのかの専門知識を身に付けた。卒業と同時に、障がい者乗馬を活動に取り入れていた旭川の福祉施設に勤めたが、活動の仕方が自分の考えと合わずすぐに辞め、釧路のデイサービス施設に移った。



ごきげんね。馬のごきげんをうかがう清水理事長。
そこには深い信頼関係が

ここでは若さを生かして、それまでこの施設では行っていなかった、障がい者と一般社会とのかかわり強化をはじめ、収入の多い仕事の発掘、遊びや楽しみの充実など、障がい者の新しい生きがいの実現に向けて大奮闘。この活動は障がい当事者や保護者から高い評価を受けたが、反面、旧態依然の対応に止まっていた施設側から「仕事が増える」、「出費が嵩む」などと総すかん。窮地に立ち「辞めよう」と決意した時、相談に乗ってくれたのは保護者の面々。本人が「将来は障がい者が馬と共に暮らす、牧場のような施設を作りたい」との夢を持っていることを知り、「その夢を今、この釧路で実践して。土地や資金は我々が出しましょう」と思ってもみない申し出。保護者の人たちは、障がいを持つ我が子の行く末を、岸本さんという“熱血福祉人”に託す思い

だったろう。申し出に岸本さんは、自分の夢が叶うとあって快諾。それからわずか1年足らずの間に、釧路市に隣接する釧路町の森林の中腹に十分な土地が用意され、事務棟、厩舎を新設、馬も1頭手に入れた。馬の世話役として浦河の養成学校時代の親友・古田^{なげとし}壮利さんを迎え入れ、さらに経理や運営全般に目配りする総務役として現理事長の清水一恵さん（49）にも加わってもらった。受け入れた通所障がい者は、保護者の子弟を中心に岸本さんがそれまで面倒を見ていた11人。

■ 待望の「馬木葉クラブ」誕生

こんな流れの中で保護者らが理事となり、全国にもほとんど例を見ない馬と共に生きる障がい者施設「馬木葉クラブ」が誕生した。この種の施設には、国から多少の補助金が出るが、これだけではNPOの運営は覚つかない。そこで一般人にも有料で馬に乗ってもらおう乗馬クラブ「ケ・セラ」を併設、畑で農作物を育て、その一部を売って収入にするという事業計画を立て、実践した。馬木葉の名は、馬が居て森林に囲まれ、農作物（葉）を育てる牧場、とういう意味でつけた。

クラブは順調に滑り出し、スタッフ、通所メンバーとも懸命に施設の充実に立ち向かった。ところが好事魔多し。開設した場所では、農地法の規定によって乗馬クラブなどの事業は出来ないことがわかり、張り切っていた一同はがっくり。やむなく馬の世話と農業だけででもやってゆこうと覚悟を決めていた矢先、今度は人間関係がこじ

れ、金銭問題も吹き出して、土地や資金の提供者から「出て行ってほしい」との悲しい通知。

強力な後ろ盾を失い、岸本さんらは一時は絶望のどん底に。しかし受け入れている通所者を見放すわけにはゆかない。気を取り直したスタッフは、新しい土地を見つけて自力で施設を続けることを決意し、土地探しに走り回り、見つけたのが現クラブのある別保だった。町はずれだが国道沿いで交通の便がよく、元レストラン跡とあって土地、建物ともにすぐ使え、厩舎として利用できるガレージもついている好条件。すぐ賃貸契約を結び、にわか大工の手作業で施設や厩舎を整備し、年の暮れに引っ越した。前施設の開設からわずか8カ月の慌ただしさだった。

■ 新施設船出、軌道に乗る

一冬明けて2006年春。資金不足とにわか大工の悲しさで、施設の整備は思うように進まなかったが、唯一、救いだったのは障がい者メンバーが、山の施設でひたすら馬の世話をし、畑仕事に明け暮れていたため体力をつけ、さらに思いやりやみんなと仲良くやる協調性を身につけていたこと。各自が、だれに指図されることなく厩舎の敷藁交換や水汲み、餌やり、馬毛ブラッシング、パドックでの手綱引きなど、それぞれの役割りや共同作業を立派にこなせるように成長していたのだ。これにはスタッフもびっくり。ホースセラピーが、障がい者の成長の大きな効果をもたらしていることを改めて認識した。

一方、施設の窮状を知った地域の人たちからは新しい馬の格安提供があったほか、動物が障がい者のお役に立つならと、ミニブタやヤギの寄贈が相次ぎ、施設は馬2頭、ミニブタ3頭、ヤギ2頭と小動物園並みのにぎやかさに。通所メンバーの動物との触れ合いや世話も一挙に増え、同時に責任感や共助性などは目に見えて向上していった。

片やスタッフの方も元気いっぱい。一般対象の乗馬クラブを正式にスタートさせる一方、経営の安定を図ろうと、旧レストランのカフェスペースを利用して「喫茶・陽だまり」をオープン。他の空きスペースにはグッズの販売コーナーを設け、他の障がい者施設で作られたアクセサリやインテリア雑貨などの受託販売にも乗り出した。

さらに動物の世話などの外回りの仕事が不得手な女子のために、室内に革製品や布小物の作業スペースを設け、スリッパや財布、買い物袋などを制作してもらい、完成品は販売コーナーで展示、即売するようにした。事情を知った革事業者や衣料品メーカーからは、革の端物や布の無償提供もあり、スタッフを喜ばせた

だが、これだけの経営努力にもかかわらず施設の台所は火の車。乗馬クラブの利用はさほど増えず、動物の飼育にはけっこう経費がかかる。働いたメンバーには給料を支払わねばならない。その他給食費、光熱費、交通費…

ここにきて、それまで頑張ってきた岸本理事長は心身共に疲れ、同時に自分が身を引くことで1人分の人件費が浮き、その分

を運営費に回せる、の思いから辞意を表明。スタッフ全員も心情を察してこれを受け入れた。2008年、岸本さんは“充電”のため深川へ去り、代わって現・清水一恵さんが2代目理事長として後を託された。

■ 新理事長大活躍 地域に融け込む

清水さんは釧路市出身。地元の福祉施設で働いていた折、初代理事長に、福祉にかける情熱とエネルギッシュな行動力を買われてクラブの創設時からスタッフに加わっていた。小柄だがバイタリティに溢れ、厳しさと優しさを合わせ持つ“肝っ玉母さん”。



和気あいあい。楽しく話しながら有機肥料づくりに精を出す通所メンバー

前理事長と苦楽を共にしてきただけにクラブの内情は熟知しており、就任と同時にクラブ運営のすべての面で八面六臂の大活躍。男女4人のスタッフもクラブ存亡の危機ととらえ、それまで一人一役程度だった役割分担を3役、4役もこなすなど全面協力。この動きを目の当たりにした通所メンバーたちも、事態を敏感に察知し、動物の世話や小物作りに一層真剣に取り組んだ。新たな事業として動物の排泄物を堆積し、発酵させて有機肥料にして売り出したり、町内外の祭りやイベントに積極的に参加し

て、自作の革や布小物の販売なども取り入れた。これらすべては、17人の障がい者メンバーが手分けしたり、全員で力を合わせて行っており、接客時の「いらっしやいませ」、「ありがとうございました」の応対もきちんと身につけている。さらに小学生や幼稚園児、老人クラブの人たちとも活発に交流して、一般人の障がい者に対する理解と認識を深める役割も果たしている。

こうした一連の活動で、苦しかった経営は徐々に好転、ここ1,2年は若干だが黒字を計上するまでに。施設の狙いが知られるにつれ、大作業を無償でやってくれる大工さんや、家で獲れた（獲った）野菜や魚介を差し入れてくれる農家や漁家などバックアップの輪もどんどん広がり、施設は、地域と共に歩む姿に変貌しつつある。

清水理事長は今後について「皆さんのお陰でここまで来れました。施設の中は動物も含めみんな和気あいあいで、一つの家族のようです。でもメンバーの高齢化も進んでいます。自立したい方にはさせてあげたいし、それがまだ先という人たちには、いずれ、仕事をしながら一緒に暮らせるグループホームのような施設を作りたいです」と夢を語っている。“肝っ玉母さん”の挑戦はまだまだ続く。

■ 連絡先

〒088-0605

釧路郡釧路町別保原野南 25 線 65-8

NPO 法人 自立訓練施設馬木葉クラブ

理事長 清水 一恵（しみず かずえ）

TEL/FAX : 0154-40-6060

E-Mail : makiba.club@space.ocn.ne.jp